



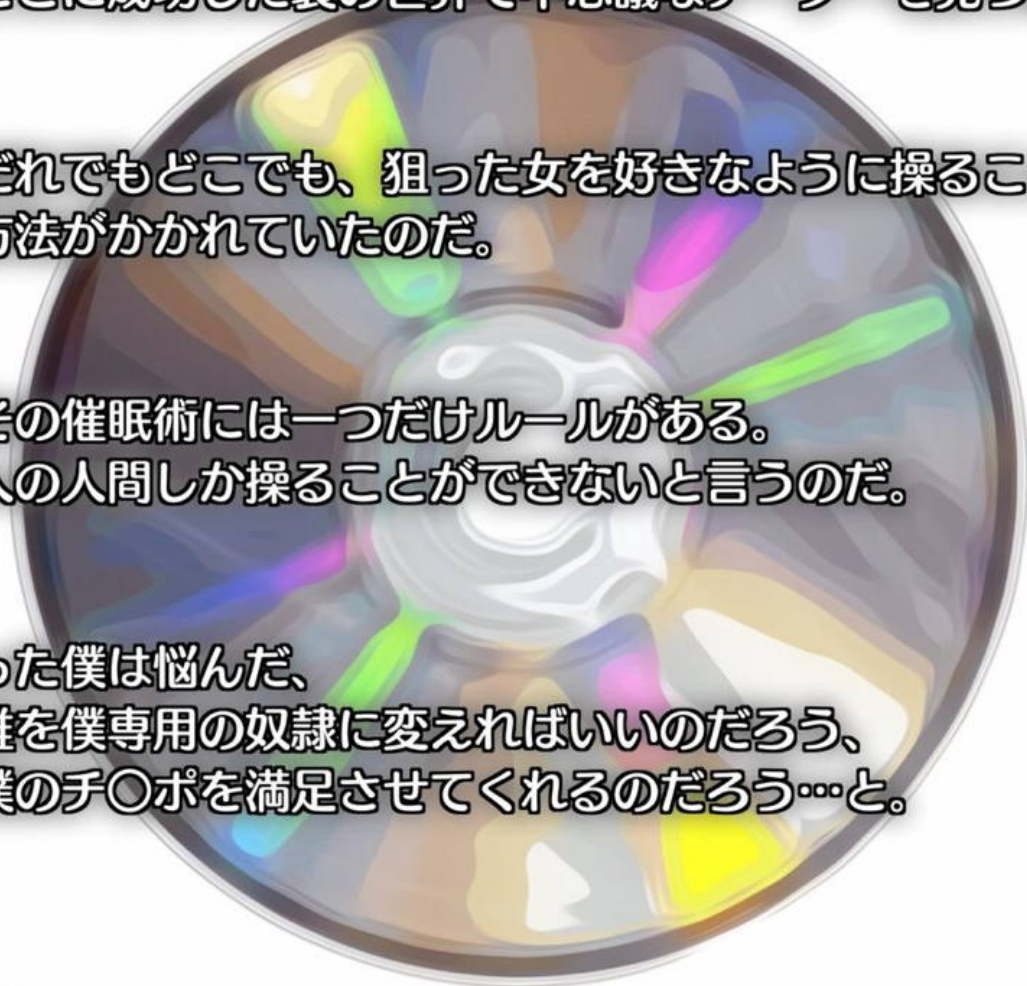
いつものように引きこもってネットをしていた僕は、最近入ることに成功した裏の世界で不思議なデーターを見つけた。

そこにはだれでもどこでも、狙った女を好きなように操ることができる催眠術の方法がかかれていたのだ。

ただし、その催眠術には一つだけルールがある。たった一人の人間しか操ることができないと言うのだ。

それを知った僕は悩んだ、いったい誰を僕専用の奴隷に変えればいいのか、誰ならば僕のチ○ポを満足させてくれるのだろうか…と。

三日三晩悩んで……………ついに答えが出た。





「ど、言うわけでもたまたまこのスイッチを  
手に入れたってわけなんだよーw」

「でも操れる子は一人だけって言うからさー、  
誰を僕専用の奴隷にするか三日三晩悩んじゃったよ♡  
なんてったってこの辺りは可愛い子がたくさんいるからね♡」

「そしてついにはひたぎちゃんに決めたのさ♡  
さあ、早く僕の前に跪いて奴隷宣言をしておくれよ♡」



「……………それで、話はもう終わりかしらっ。」

「ふえっ？！、イヤ…だから僕の奴隷に……………」

「呆れた、スイッチ一つで私を手箠めに出来るなんて本当に思ってるの？」

「あなた正真正銘の大馬鹿みたいねw」

「で…でも僕の命令通りにホテルまでついてきたし…」

「それはあなたが余りにも怪しかったから少し調べようと思っただけよ、でもその心配は取り越し苦労だったわね、だってあなたはただの妄想クズ野郎なんですものw」

「そ…そんな……………」





まさかこのスイッチが効かないなんて……  
もしかしてあの声は嘘をついたんじゃない……それともあれは夢……？

い、いや、そんなはずはないっ！

現に僕はこのスイッチを持つてるじゃないか……！

あれが夢だったらこのスイッチはどこで手に入れたっというんだよ……！

そ、そつだ、願いのかけ方が間違っていたんだ……！

『ひたぎちゃんは僕の奴隷にならなければいけない』なんて  
分かりやすい言い方しないで率直に『僕の奴隷になる』って  
言えばよかったんだ……！

ズ  
ー  
ン

支配できるのは一人だけ……願いが一つしか叶えられないわけじゃない、  
もう一回やり直せば……！

「さあ、始めましょうか」

「……?」





「わ、わ、わたがちゃんその格好は……」

「その格好って……」

裸にならなければ勝負を始めないともいえないじゃないか」

「勝負……？勝負って一体……」

「………はあ？」

ホント愚図ね、いちいち言われなご分ならならぬからさ  
この状況で勝負なんだから

『おま○こハメハメセックス 勝負』

に決まってるじゃないか」

「お……おま……」

レ  
レ  
レ









「♡~♡~♡」

「さあ、それじゃあ早速始めましょう♡」

「うふふ、鼻息が荒いわよ。」

「何をそんなに興奮してらるのさうら〜」

「何をって……」

「これがらたまにちやちやのRONN…」

「裏でオとは比入物ならならなら可愛ねだ…♡」

「あら、褒めていたいのさうら〜」

「もっともあなたのおっぱいなら何に言ってもいいわね♡」

「それにしても裸になったんですわね♡」

「これならセックス勝負の私の勝ちは間違いないわね♡」





「そ、そっはいかないぞ♡  
この勝負に勝って言いついどを聞かせるのは僕なんだから、  
まずはこの玩具でひたきちゃんをトロボロボにしてあげよう♡」

「んっ……あら、それってローター？そんな物なら私の部屋にたくさん  
あるわよ、悪いんだけど勝負にならないんじゃないかしらっ？」

「え、ごうんせめめめ……さ、それはいい……」

「そんなの決まってるでしょ、オナニーをするためよ。」

阿〇々木君が襲ってくるからとんごん性欲が溜まってる……  
今じゃ日に三回はオナニーしないと眠れなくなっちゃったの……」

（すい、普段なら絶対に言わないような秘密をスリスリと……）

「なるほど……毎日使ってるからこの程度じゃ感じないと……w  
でもこういう物は使う人によって感じ方も変わるんだよ♡」

















「はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…」

「グフフ♡さあ、次はいよいよひたぎちゃんま○んじ  
挿入だ♡覚悟はいいよねww♡」

「ふう、ふう…ぐ…愚問ね…」

「この私があなたの汚らしいち○ぼなんかには怯える訳  
ないでしょ……」

キ○んちゃん♡

「あれ、そっなの？  
やっぱひたぎちゃんは度胸があるんだなあ♡」

「う、うるさいわね、いいからさっさと入れたらどうっ？  
こんな極上おま○こを味わえるチャンスなんてあなたの  
人生にもつ二度と訪れないわよ」

ひたぎ♡

ハッ♡

ハッ♡





「お、奥まで届いてええー！」「死んじやうじやう……！」

ズニツツーズズズズズチユウウウウツツー……！！

「んぎうううう……！！」

い、痛っ！いたいっ！

いっ！いたいっ！いたいっ！のおおおー……！！

（お、奥まで届いてええー！）

し、死んじやうじやう……！！

んぎう！

ズニツツー

ズニツツー

ズニツツー

んぎう！



「うぎゃー……SSS……ちゅるるるる……」

「い、痛い……」

「しよ、処女を失う痛みがこんなに大きいだなんて……痛すぎて……あたま割れそうよおお……」

「うほ♡まさかひたぎちゃんが処女だったなんて……感激だあ♡も、もう少し優しくしてあげたほうがよかったかなあ……?♡」

「う……ひるむいわね……余計なお世話よあ…………しよ、勝負の途中に遠慮はいらな……んいSSS……」

「そっぴだよねwそれじゃあ動かすよ♡♡」































「はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…♡」

「はほお♡気持ちよかったあ♡ひたぎちゃんも良かったでしょ♡」

「……………く、別」……

「じつはさゆん♡♡♡ならわ……」

「ええ、本当」……

「あ…当たり前よ…あなたの様な童貞の乱暴なセックス…  
こ、これ以上イカされるわけないっ……♡」

「そうが分かったよ、それじゃ僕とひたぎちゃん  
どっちが先に降参するか正々堂々ハメハメ勝負だw」

「ハア」

「ムムム」

「アハハ」





【1時間後】

「ひおおおおんっ♡ひゃひららっ♡  
「じゃ…っ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

ズッ!

「どうしたのひたぎちゃん♡  
音が無いよっ…もっイカないんだよねっ?」

「い、いやあああっ! な、なんでっ! っ二度もイカないで  
ハメハメし続けられるのおおっ!?!」

ズッ!

「グッ♡願い事はひたぎちゃんが僕の性奴隷に  
なるっ! だからね、僕には絶対に僕には勝てないんだよ♡」

ズッ!

ズッ!

おんっ!

んおっ!











「おひよおおお♡ほっ♡おひよ♡ほおおおお……♡」

「あ……あひい……♡ま……負けじもっ♡……♡  
あなた様のお○んぼに……完敗しまひらああああ♡」

「あれだけ偉そうに構えてたくせに情けないなあw  
負けを認めたからにはひたぎちゃんは僕の性奴隷だよ、  
分かってるね♡」

「はひい……い、今からひたぎは……♡  
ご主人じゃまに絶対服従を誓いましゅっ♡……♡」

「♡♡それじゃご主人様の命令だ、もっ♡」三発ハメようね♡」

「ひいっ……っ、許ひれええ……っ……」





「さあひたぎちゃん、僕の尻子を綺麗にお掃除してね」

「んっ、顔に近づけなさんだ…んっ、臭う…」

「んっ！」

「どうしたんだい？」

まさかご主人様の子○ポを舐められないなんて言わないよね？」

「ああ…どうして…この人に命令されると逆らえなくなると  
オ○ンポを舐めるのが当たり前前思えてきちゃったわ…」

「え、ええ…もちろんだ舐めるわ…  
セックスの後の子○ポ掃除も敗者の大事な役目ですもの」

「んっ、んっ、んっ」



























【二週間後、〇〇学園の屋上】

「あなたがメールの差出人…わたしに何かがよろかじらっ？」

「やあやあ待ってたよひたぎちゃっくん♡」

最後に会ってから9時間も経っちゃったんだから、寂しかったでしょ？」

「……………あなた何いってんの？」

私があなたと会うのは今が初めてよ、その不細工な顔、

一度会ったら忘れられるはずないじゃない？」

「はっひっ、冷たいなあ♡」

まあ一度記憶を消しちゃったからなあ、分かるなへん当然だよ♡」

「じゃあ……この動画を見れば少しは思い出せるかなあ？」

「ドクドク…」



『おほーっ♡ご主人様っ♡ご主人様あああああっ♡♡』

『じ…嘘…なによけれ……こんなの知らない…わ、私こんな事してないわよも…』

『グフフ、これが真実だよWこの後もひたぎちゃんは毎日僕とハメハメしてたんだよ♡』

『ぶ…ぶぢけないでっ……ご、こんなの合成…そ、そうよ、合成に決まってるわ…』

『そっじゃなきゃあなたみたいな気持ちの悪い男とこんな事するはずない…っ！』

『えー、僕との思い出を否定するのぉっ…ちよっとショックだなあ♡』

ブルブル











「ほーら、僕らの甘いメモリーをもう一回見ようね♡」

「んほおおおおおつ♡いいっ♡いいれすご主人様あああつ♡♡」

「い、嫌あああああつ！やめてえ！そんな物見せないでええつ！」

「(う、これが…このどじょうもなく淫らに鳴いているハレンチな女が本当に私なの？」

「全く記憶にならないの」この声を聴くと「アマン」が熱くなる…っ！

「いっっ♡身体が熱いよお♡マンの血が抑えきれないのかなあ？」

キキキ！

ぐぐぐ

ぐぐ

ぐぐ



「んあああああああああああああああ♡♡♡♡♡」

「ほらほら♡♡♡♡♡がいんだろ♡♡♡ひたぎちゃん♡の身体の事なら  
もう全部お見通しなんだからな♡♡♡W」

「いやっ♡いやいやあ♡♡そこ虐めないでええっ♡」

んひいっ♡や、やだああ♡こんな指で気持ちよくなるとなりたくないのにな…  
あひゃ♡ひぎっ♡ひんっ♡ひんんううっ♡♡

（いやあああああああ！なによこれっ！…？）

なんで私こんな感じちゃってるのぉ…？…こんなのおかしいわよぉ…！

ああ

すーっ

すーっ

すーっ

すーっ





「うやうやあーうやあー！イクっ！ー！イカされるんじゅんじゅん！ー」

「んほっ♡ほひっ♡

ほひよおおおお♡♡」

「おほっ♡イッた！った♡しかもオシッコのおまけ付きだww」

んんん！

んんん！

んんん！

んんん！









「じじじじじ………」こんな屈辱………い……やあああああ………」

「あれ、ひたぎちゃん壊れちゃったのかな？ww」

「あ、あなた一体なんなのよおお……」

「なんの恨みがあって私にこんな事をするのよおおおお！？」

「まあいつもは催眠状態でセックスしてたんだけど、

ひたぎちゃんに夢中になる程それじゃ満足できなくなっちゃったんだよね♡  
身体だけじゃなく心も完全に僕の所有物にしたいんだ♡」

ブルブル

フ

ブルブル

「ご、ごいつ目が本気……本気で私を墮とすつもりでいる……」

「そしてこの男にはそれをする力が……ご、怖い……助けて……助けて阿○々木君……」





















「おひよおおおおおお」

「おひよおおおおおお」

「おひよおおおおおお」

「おひよおおおおおお」

「おひよおおおおおお」

「おひよおおおおおお」











「わっわ♡まじかハメただけで記憶が戻るなんて…  
記憶を消しても身体は僕の子♡ホを忘れられなかったんだねえ♡」

「わっわ…呼ねなら…あなたの事は絶対「私の手」刺し殺してやるわ…」

「ああ、その全いに絶望した様なアへ顔いいなあ、最高に興奮するよ♡  
これは記録に残わらない♡」

「くそお…私の言葉なんて少しも聞かなくてなら…  
もう私の事は全て支配したと思っっているんだわ…」





「おま、マ○」がよく見えるわい」知はははは」

「なに…なに…なに…は、せうせう……」

（ああ……な、何でなの……？  
こ、この人に命令されると…  
身体が震えて…どうしても逆らえなくなるっ……）

「おま、マ○」

「マ○マ○♡マ○マ○のヒロマ○」が丸見えたぜ♡  
マ○マ○の言い生意気女もこっぴつなったら無様なものだな」

「うっ…い、言わないでえ……」

（ダメ…言い返す事もできない…  
この人には勝てないって身体が覚えてちゃってる……）





「んへう……はあ……はうんた……♡」

「ほらほら、オ○ンポ欲しいんだろっ」

「それなら雌豚らしくおねだりしなう♡」

「ふ、ふぞけないで……子○ポ……子○ポなんて……」

「ほ……欲しいな……ない……ないんだからああ……」

「本当に……ほら見ろよ、この嬉しい子○ポをお♡」

「ひらひら……やめえ……子○ポ見せなうぞえ……」

「そんなの見せられたら……わたし……♡」

「ああ……なんて大きなオチ○ポ……カニも尻り廻りてえよ、あれで突かれたら……わたし……♡」

「んへう」

「んへう」





「はふう…ふうう…ち、ち○ポ…オ○ンポオ…♡」

(あ…ああ…頭がポーツとしてうまく動かない…  
分かっているのはオチ○ポ欲しいって事だけ…  
ダメエ、もう我慢できないいいい…♡♡♡)

「お、お願い…あなたの…」

「ご主人様だろ？」

「ご…ご主人様っ…も、もう我慢できないんですっ♡  
どうか…どうか私の卑しい雌マ○に…ご、ご主人様の  
雄々しいオチ○ポをあてがって下さいませえ♡」

ギョ!

んん

んん  
んん













ケルル!

「オリアー！出すぎ雌豚ああああー！  
感謝の言葉を述べながらイケええええ！」

「んほおおおおおおおおおおおおおお♡♡♡  
ありっ♡ありらひよおおっ♡  
ありがとうおいららまひゅっ♡♡♡」

んっ!

んっ!

んっ!

「イキユイキユウウツ♡  
イッキムウウウウウウウウウウウウウウウウ♡♡♡」



「わっっっ…♡さっっ…ggg…んっっ…♡♡」

（あへえ♡あ、頭おかしくなるくらい気持ちいい♡  
もうダメ…こんな気持ちいいの知りちゃったらもう  
この人から離れられない…♡）

「やっぱりひたぎちゃんの穴は最高だなあ♡  
これからもしたい時はいつでも気軽に呼び出すから  
学校でも彼氏とのデート中でもちゃんと断って来るんだよ♡」

「はひひひ…承りまひらあああ…♡  
お手軽セックス使所ひたぎをいつでもお呼びならはっっ♡」

（ああ…わたし…便所にさせられちゃったあ…♡  
ん、じめんな…阿○々木くん…♡）

「ハッハッ」

♡♡♡

ハッ  
ハッ

ハッハッ





















「あひいいいつ♡も、もう許ひれえええつ♡  
死ぬ死ぬっ！死んじやうのおおおおっ♡」

「あはっ♡」

「さっさと帰るな♡やいほロキ難ならんからな」

「あはっ♡」

「あはっ♡」

「ほれほれもっ♡腰振れよ、  
それじゃファンも興奮してへれなぞ」

「い、いやよお♡そんなファンなんていらぬわあ♡  
知らない男の人に私の無様な雌犬の姿を見られていたなぞ、  
そんなの知っちゃたら…わ、わたひっ♡」

「あはっ♡」

「くっく、毎日更新してるからアウセ人数がとんとん上がぬぞ  
俺はブログーとしての才能があったのかな」

「おひよおおおおおおっ♡

イッちやいらまひゅ♡イッちやいらまひゅ♡♡♡

おひん

アッ

んおお

（あああああああっ♡

イクうっ♡またイクのおおおお♡♡♡）

「フッフッフまたイキやがったw」

んんんんん







「よ、よく見えますか…ご主人様っ…」

「うう…自分からお尻をひけるなんて…」

「こんな無様な格好…」

阿良○木君「見られたら生きたいはならわ…」

「おい、なに恥ずかじがってるんだよ、昨日だって嬉しいさうに」

「尻尾を振っておなだりしてただらう」

「う…わ…分かって…ます…」

「おはー」

（ああ…またあんな事を言わせるだなんて…なんて鬼畜なの…  
ひま言わないとオチ○ボもええなら…  
そんなの……そんなの耐えられそいならわあ…♡）



「じ、ご主人様あ♡  
ひたぎはオチ○ポを前にするごだらしくなく発情しちゃっ  
変態丸出しな淫乱雌豚ですっ♡」

「今もご主人様のオチ○ポを前にして、ひたぎのオマ○は  
エロエロお汁でべったりになっちゃいましたあ♡」

「生懸命オマ○にご奉仕しますっ♡  
雌穴フリフリしてご主人様をたくさん気持ちよくしますから  
ご褒美をたくさんくらはあい♡」

ハムハム

んんん



「ほひいらっ♡ひおんっ♡ひんっ♡  
ひひよおおおおおおおおおおおおおおんっ♡♡」

ひよ

「オラオラマー…どうだ、気持ちいいだろう…?」

「ほひいらっ♡ひんっ♡ひんっ♡  
オチ○ポ気持ちいいしゅう♡ほひっ♡ほひいらっ♡」

「ひあああああんっ♡  
気持ちいいっ♡オマ○」気持ちよすぎるよおおおおおっ♡  
こんな気持ちいいと全然誤魔化せないっ♡」

（ひあああああんっ♡

気持ちいいっ♡オマ○」気持ちよすぎるよおおおおおっ♡  
こんな気持ちいいと全然誤魔化せないっ♡」

ズロズロ

ズロ

「全くだらしないマ○」だな、ちよいと聚いだぶくを離れ離れに  
なって…おい雌豚、恥ずかしくないのか?」

（あああああんっ♡こんな奴に好き勝手言われて…  
悔しいけど…オ○ンポの気持ちよわっ♡は逆のえならわああ♡）

（あああああんっ♡こんな奴に好き勝手言われて…  
悔しいけど…オ○ンポの気持ちよわっ♡は逆のえならわああ♡）











「げっ、すげえイキつぶりだったなあw」

「おひっ♡ひっ♡ほひっ♡ほおん♡」

「んほおおおおおっ♡イ、イツちやったあ♡  
お、お尻がこんなに気持ちいいなんてええ…♡♡」

「パーカ、そんなわけないだろ。」

「そこで感じるのはお前が淫乱な雌豚だからだよw」

「い…淫乱…うう…んんんんん…」

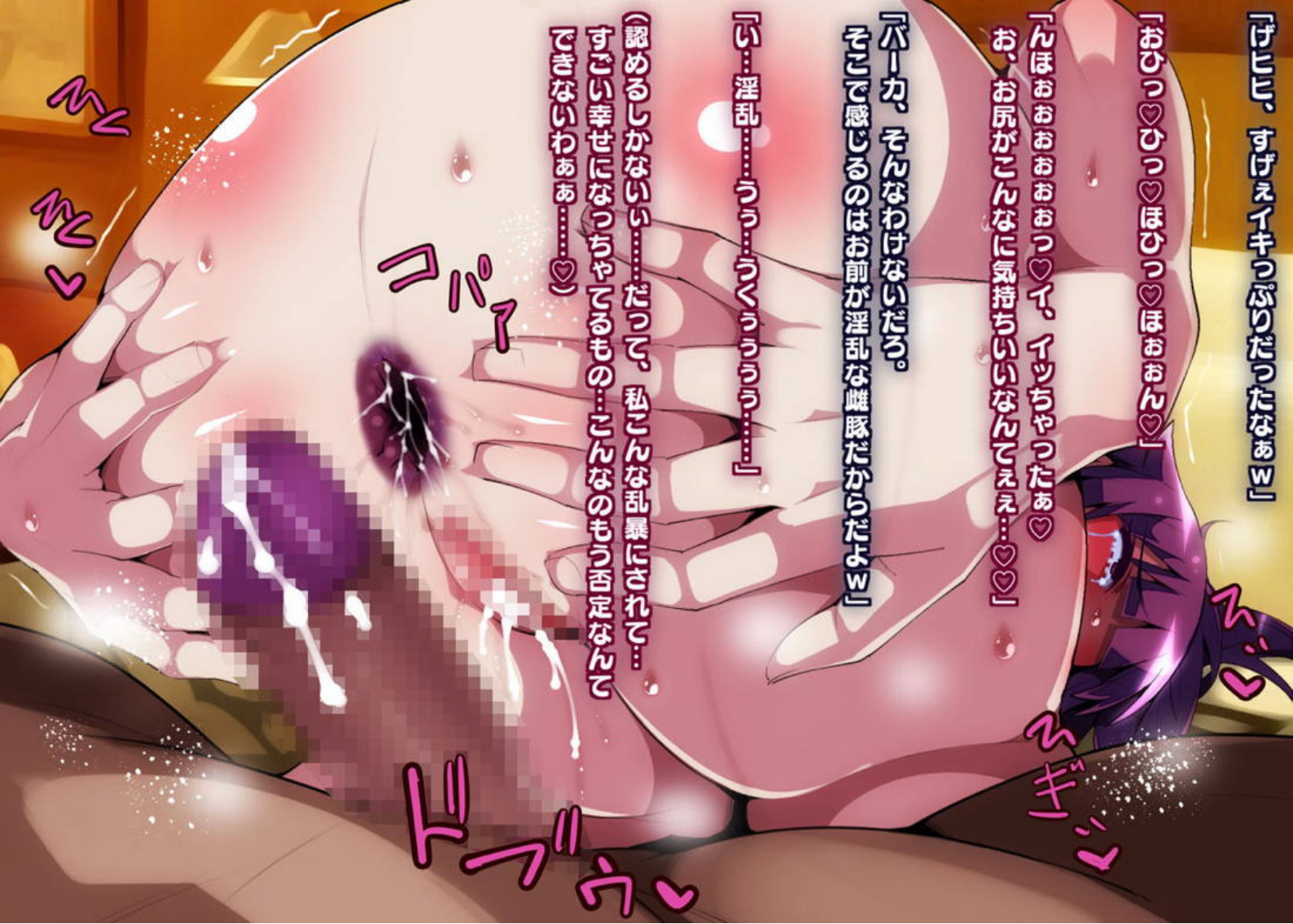
（認めるしかない…だって、私こんな乱暴に耐えて…  
すっごく幸せになっちゃってるもの…こんなのもっ否定なんて  
できないわああ…♡）

コッパッ

ドブッ♡

んぎん♡

んん♡







「……ガチャ！」

おい！戦場ヶ原！そこにいるのか？！」

「おっと電話がかかったぞw」

「ほら早く出るよ、あんまり相手を待たせるじゃねえぞw」

「はい♡承知いたしましたあ♡」

んんん

「はあはあ…♡  
こんにちわ♡、阿良○木くん…♡」

ガチャ









「わたしは…わたしは…わたしは…わたしは…うあ……」

「ご主人様とセックスしてるの♡」

「……あ……」

ズロ

ズロ

ズロ

ズロ



「んひゃひいひいひいひいっ♡

「ご主人様の極太子○ポ気持ちよすぎるのお♡」

ズボズボ

「せ、戦場ヶ原……？  
ハハハ、冗談だろ…  
お前何言ってるんだよ…」

「ひおおおおおっ♡

「ご、こんなすごいのは知っちゃたらもう阿良々木の  
粗子なんかじゃ満足れきないっ♡♡」

ズボズボ

んぎんぎん

あはは

「そ…そんな…  
い、いやだ、お前  
何言ってるんだよお…？」



「ひよおおおおおおおんっ♡  
イクイクイクウウ♡あなたも私の声を聞いて  
絶頂ひれええええっ♡♡」

「や、やめろおっ!  
それ以上はダメだあああああ!」

「もう無理いっ♡♡♡  
んひよ♡おひよおおおおっ♡♡♡」









「んはあああつ♡あひやつ♡  
ひやううん♡いひらららら♡」

ズボズボ

んん

おほおほ

おん

「おら、マ○」がどんどん緩くなってきたぞ、

もっとキンク締めやがれ雌豚、ホント役に立たねえなあWW」

「はひららら♡締めましる♡」

オマ○「きゅる♡締めましる♡」

「あああん♡叱られる♡とも喜びになっちゃっ♡」

わ…私もう完全にご主人様の虜なんだわ…♡♡」















「んひょっ♡ほっ♡おひょっ♡ひよおおおおおっ♡」

（あああんっ♡お尻拡がっちゃうううう♡）

極太子○ポでお尻ガバガバにされちゃうのおおお♡♡）

ズ  
ズ

ズ  
ズ

ズ  
ズ

「ゲへへッ、大分ケツの穴でも感じられるよん♡  
なっただじゃねえかW  
おらおら、こじがお前の弱点なんだろう?」

「ひゃひらら♡ケツま○こ気持ちいいしゅううう♡

育ててくださったご主人様には感謝しかりまひえんっ♡♡」

お

お









「おへええええ♡ひっひっひっひっ……♡  
せ…精液いっぱい…わたひの穴に注いでオオっっっ…ありがとんぱねらますっ♡」

「ぐっ♡もっすっ♡かなり俺の虜だな♡  
この間まで付き合っていた彼氏のいとなごはれちゃまったんじゃならぬか?」

ムムム

「はあい♡阿○々木くんの事なんぞえ…も…じいじもいられじやう♡  
ご主人様がわたひの全てれすうううう♡」

「ああん、気持ちいい♡  
愛した人を裏切って雌豚として振る舞うのが最高に気持ちいい♡  
わたし…こんなクズ人間だったらんてえ…♡」

「はあああああん♡これからもお好きな時に  
好きなだけ可愛がってくださいませ♡♡ご主人様ああ♡♡」

ムムム

ムムム

ムムム





「ううう……うああああああ……あああ……」

「せ……戰場ヶ原……だ、ダメだ……  
そっちに行っは……うああ……待ってくれえ……」

「……きて……起きて……起きて、阿良〇木くん……」

ガガガ  
ガガガ

「せ……戰場ヶ原……？」



「せ、戦場ヶ原！？今までどいじ………！？」

「？ 何を寝言を吐いているのかしらっ」

わたしはさっきから寝坊助の目の前にいるのだけども？」

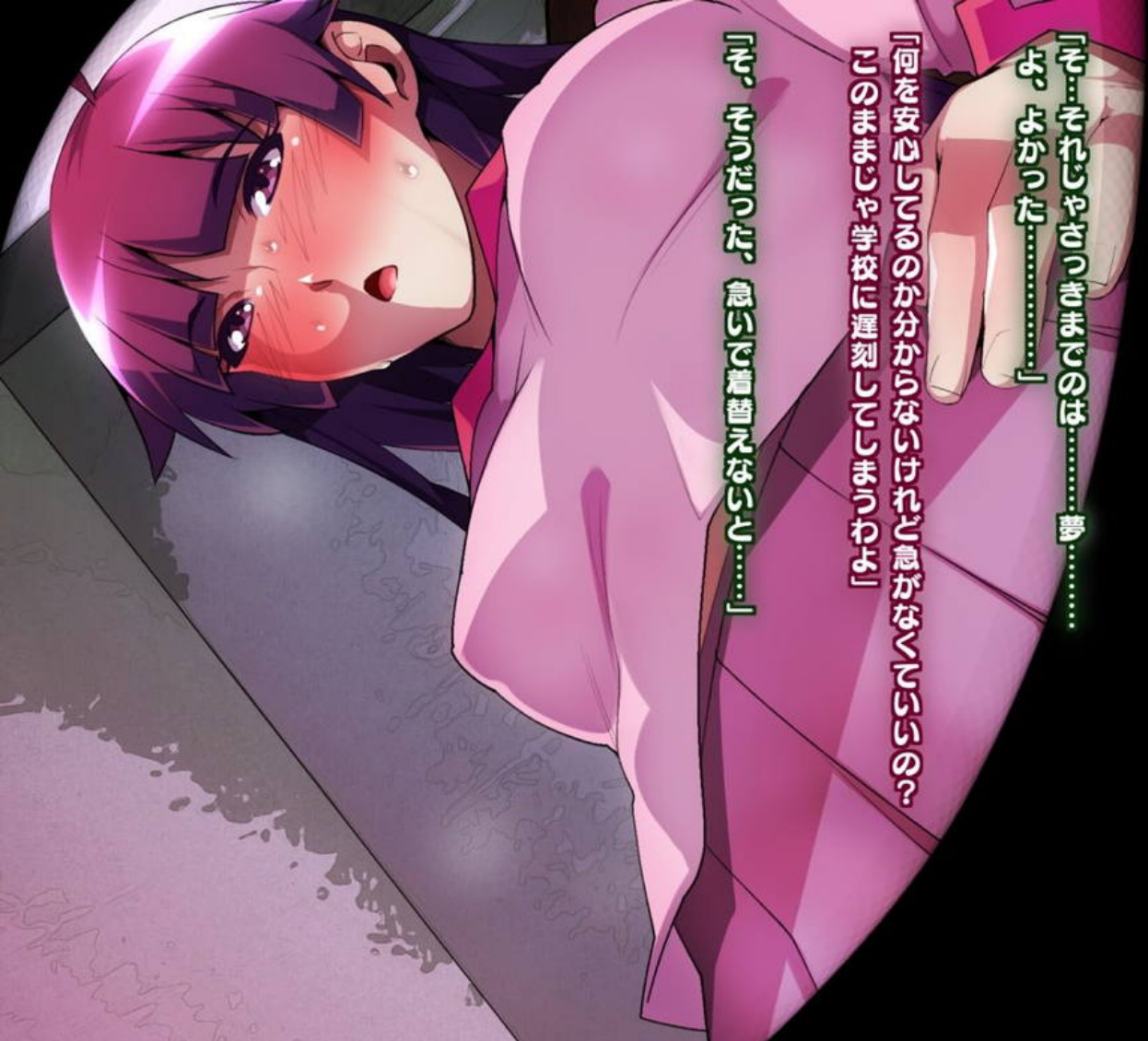
「そ…それじゃあつきまのほ………嘘………」

「よ、よがった………」

「何を安心しているのかわからないけれど息がなくなってるの……」

このままじゃ学校に遅刻してしまうわよ」

「そ、そっだった、あつこ君助えなう……」





「なあ battlefield 原、一つ約束をしてくれないか？」

「なあにっ、言っつてみてもいいわよ」

「これから先……何があっても俺がお前のごとを守るから、だから俺を信じて……ずっと一緒にいてくれないか？」

「この先、死が俺たち二人を分かつまで、ずっと二人で生きて……」

「嫌よ」

「い、嫌って……即答しなさいわねよ、」

「これは冗談なんかで言ったんじゃないんだから……」

「嫌よ、だって私には……」

「愛すべきご主人様がいるのだもの♡♡」







「待ってる戦場ヶ原…僕が今すぐ助けて…ぐっぐっ！」

「ぐっぐ、起きられないだっ」

君が寝てる隙に身体を麻痺させる薬をたっぷり塗りつけたからねえw」

「それじゃは合意だっって言ってるだっ」

「どうもごんなに嬉しそっ」…なあ雌豚めっ」

んんんん

「んほおおおおおおおおおおおおおおおっ♡」

「ひゃ、ひゃひいら♡」

ご主人様子○ポで可愛がっていただいで…っっ♡  
ひたぎは世界一の幸せ者れしゅうううっっ♡」

ズッ

ズッ

ズッ

「そ、そんな…嘘だら…っ」















